

Q^キ
r^ユ
O^ロ
S^ス
の
女

第一章

1

柔らかな朝の光が、女の背中に淡い陰影を映し出す。

これ、カシミアなんだね——。

明るいグレーのニットを、ふわりと女が羽織る。

振り返り、どう？ と彼女が訊くと、男の声が答える。

うん、いい感じ——。

重なる二つのシルエット。背中から抱き締められた女は、照れ笑いを浮かべながら肩越しに男の顔を見上げる。

あれ、変だな。なんで男の顔が、はつきり見えないんだろう。そういえば女の顔も、いつのまにかボヤけてる。これじゃ、せつかくの美人が台無しじゃないか。さつきまで、あんなに綺麗に、はつきりと見えて——。

「……おい、こら」

コツツ、と側頭部に衝撃を受け、急に視界が薄暗く転じた。

食べかけの料理が所狭しと並んだテーブル。潰れた吸殻が四本入った灰皿。底に一センチほどウーロンハイが残ったグラス。雑に畳んだお絞り。

「慶太。お前、人を呼び出しという居眠りはないだろう」

そう、そうだった。

矢口慶太は、自分が置かれた状況をようやく思い出した。

次号のネタに困って、大学の先輩である中里を呼び出した。中里はテレビ太陽のダイレクター。芸能界の裏事情には慶太の何十倍も明るい。きつと何かいいネタを聞かせてくれるはず。

だが、中里がトイレに立った数分間に、つい気がゆるんだ。睡魔に視界を盗まれ、重力を失い、いつのまにか無意識の水面に漕ぎ出していた。不思議と、いい夢を見ていた気分だけは残っている。優しく、静かで、とてもハッピーな——いや、それどころではないのだった。

「……すみません。ちよつと、徹夜が続いてたもんで」

「そりゃこつちだつて一緒だよ。それをお前、後輩の頼みだと思うから、わざわざきてやってんじやねえか」

「いや、ほんと、すみません。恩に着ます。感謝しています。……飲み物、どうしますか。もう一杯、生でいいですか」

目一杯声を張って店員を呼び、生ビール、ウーロンハイ、ほっけとイカの一晩干しを追加する。オーダーを復唱すると、店員は「失礼いたします」と襖を閉めて下がっていった。

二人になったところで、改めて中里に訊く。

「どうつすかね、最近のプロダクション事情とか。なんか、面白いネタないですかね」

中里は片肩だけをひそめて首を傾げた。

「ここんとは、あんまりないね、そういうの。しばらくはWinningの安定政権が続く感じでしょう」

「プロダクションWing」は、業界全体に多大なる影響力を持つカリスマ、石上翼が代表を務める大手芸能事務所だ。それもあり、Wingは「プロダクションを管理するプロダクション」のようにもいわれている。

しかし今一つ、慶太には納得がいかない。

「そもそも石上社長つて、なんでそんなに力を持ったんですか」

中里は生ビールの残りを飲み干し、短く息をついた。

「石上社長は、確かもともとは、不動産業界の人だったはずだよ。よつぽど、そちの鼻が利くんだろうな。バブル崩壊寸前に手持ちの物件すべてを売り抜けて、詳しい経緯は知らないけど、それから芸能に転身してきたらしい。当時いくつかのプロダクションの再建に手を貸して、その辺からじゃないかな。あちこちに睨みが利くようになったのは」

慶太は、石上翼を直接は知らない。せいぜい関係資料で顔写真を見たことがある程度だ。それでも漠然と、睨まれたら怖いだろうな、とは思っている。比喻でもなんでもなく、あの顔は単純に怖い。イヌワシなどの猛禽類を髣髴させる目鼻立ち。あの顔で「その件はなかったことしてくれ」と直にいわれたら、どんな記事も掲載を見合わせてしまいそうだ。あくまでも個人的には、だが。

「下手に独立をすると、石上社長に睨まれて、干されることもあるんでしょ？」

「そうね。そういう、業界の調整役になってるところはあるよな。でもそれは、別に悪いことではないでしょう。むしろ、あの人が調整役を買って出なければ、もつと怖い人たちがその代わりになろうと乗り込んでくるから。そっちの方がよっぽど、業界にとつては不都合だと思うよ」

確かに。最悪にならないための必要悪、といったところか。

「そうつすよね……じゃあ、他には何かないつすか」

「なんだよ、たとえば」

「誰かと誰かが、現場でいい感じだったとか」

「そんなの、俺の口からいえるわけないだろう」

「中里さんの現場じゃなくなつていいつすよ。この前どこそこで、あの俳優とあの女優が、みたいな。あるでしょう、そういうの。耳に入つてくるでしょう」

中里は「うーん」と腕を組み、口を尖らせた。

それが、急にバカツと開く。

「そーいや慶太、あれ知つてるか、『Q r o s の女』」

「ああ、はい」

「Q r o s」といったら、今や日本のファストファッションを代表する一大ブランドだ。毎回凝つた趣向のCMを制作し、著名人も数多く起用している。その最新CMに出ている女の子が今、ちよつとした話題になつている。

「すつごい可愛いのに、どこの誰だか分からないつていう、あの娘のことですよね」

慶太も今日、出かける前にテレビで観た。ついさつきもどこかで観た気がする。柔らかな光の中で、カシミアのニットを羽織る美女。それを背後から抱き締めるのは人気俳優、藤井涼介だ。出演者はその二人だけではない。他のシーンにはモデル出身の人気女優、福永瑛莉、シンガーソングライターの島崎ルイ、イケメン格闘家の近藤サトルらも出演している。だが、話題は完全に藤井涼介と、その相手を務めた女性に集中してしまっている。

あの娘は誰？ 女優？ モデル？ 日本人？ 韓国人？ 何歳？ なんて情報がないの？ 表に出てこれられない事情でもあるの？ なんて藤井までノーコメントで通さなきゃいけないわけ？ もしかして、プライベートでも付き合ってるとか？

現状、週刊誌はまだどこも記事にしていけないが、ネットではすでにかんりの盛り上がりを見せている。ほぼすべてがデマか勘違いだろうが、目撃談もいくつか報告されている。今後、その正体が明らかになるときが一つ、ヤマになるだろう。CM通りの美女なのか、実際はそれほどでもないのか。芝居はできるのか。年はいくつなのか。なぜすぐに出てこなかったのか。事務所はどこなのか。

あれさ、と中里が身を乗り出してくる。

「こんなこと本当にあるのかってくらい、情報が出てこないんだ。藤井くんってWingでしよう。何か知ってるかと思って、Wingの他のマネージャーにも訊いてみたんだけど、全然分かんないって。代理店は白幸堂、制作はフォークスって会社なんだけど、この筋にも全然情報が回ってない。知り合いの画像処理やってる奴なんてさ、こんな女、現実には存在しないんじゃないかって、CGじゃないかなんて言い出す始末でさ」

さすがにCGはないだろうが、今どきそこまで正体が分からないタレントというのは、ある意味珍しい。

「その話、もうちょっとなんかいいですかね。ほんの、取っ掛かりになる程度のことでもいいんで。あとは自分で調べますから」

「取っ掛かりねえ……撮影した監督にでも訊いてみたら？ オオクラセイジ。分かる？」
劇場公開映画も何本か撮っている、あの大倉清二監督か。

中里とは店を出たところで別れた。

「じゃ、また連絡しますんで。よろしくお願いします」
「おう、またな」

もちろん、今夜の払いは慶太が持った。
数秒、中里の背中を見送ってから腕時計を覗く。十一時二十二分。思ったより夜は深くない。もう一軒、知った人間のいそうな店にでもいこうか。そんなことを考えながら歩き出す。

慶太が記者契約をしている「週刊キングダイ」は、毎週水曜日発売。今日、十一月五日は火曜日。発売前日に当たる火曜は、記者を含む編集部員にとつて貴重な休日となる。だが、火曜でなければ会えないという人も世の中にはいる。中里がそうだった。どうしても今のスケジュールからすると、夜は火曜しか空けられないという。そんな場合は、休日を返上してでも会いに行く。遠くても、時間が早くても遅くても、駆けつける。それが記者というものだ。人と会って、関係を作ることからしかネタは生まれないし、拾えない。

そこまではいい。慶太も今年で二十九歳。週刊誌に携わるようになって六年。記者という仕事
がどんなものかも、もう充分分かっていているつもりだった。実際やり甲斐を感じていたし、自分が
書いたものが記事になればそれなりの充足感も味わうことができた。

ただしそれは、あくまでも政治の世界に限ったことだった。

今年の九月に社員の人事異動があり、それにとりなつて「週刊キンダイ」の各取材班もシャッ
フルされた。契約記者である慶太は、政治班から芸能班へ鞍替えになった。

正直、エライことになったと焦った。

政界についてなら、たいていのことは分かる。各議員の生活実態や人脈はいうに及ばず、銀
座、赤坂ならどこにどんな店があり、どの料亭を誰が贖^{ひいき}にしていて、どのクラブに誰が通っ
ていて、人と会うならどのホテルを使うのか——そういった政界の周辺事情は表も裏も、ある程
度は把握していた。

だが芸能界というと、これがさつぱり。チンプンカンプンなのだ。

人種が違えば飲食をする街も、行動パターンも違ってくる。

芸能人は売れっ子ほど事務所には顔を出さず、自宅から仕事現場に車で直行することが多い。
だから極秘で引越しをされ、自宅が分からなくなると、急にその人の行動が把握できなくなっ
たりする。

メディアに出ているときとのギャップ、というの大きいにある。私服がイメージより派手だつ
たり、逆に地味だったり、一見ただけでは誰だか分からないことも多い。テレビで見る印象よ
り小柄だったり、もつとずつと大柄だったりもするので、目の前を通り過ぎても見逃してしまう

ことすらある。

飲食をするのは六本木か西麻布、たいていは個室のある飲み屋だ。この手の店のスタッフは口が堅いため、なかなか情報提供はしてくれないが、完全には、わけでもない――。

そう。こんなふうには、向こうから連絡をくれることがある。

震える携帯をポケットから取り出すと、ディスプレイには【鳥幸】と出ていた。渋谷にある高級焼き鳥屋だ。

「はい、もしもし」

『あ、矢口さん、俺です、分かりますか、堀井です』

「うん、どうした」

『ちようど今、きてるんですよ。鳥崎ルイが』

ほう。「鳥幸」は確かに芸能人もよく使う店だが、この網に鳥崎ルイがかかるとは想定外だった。

「分かった。今すぐいく。ちなみに一人？ 男連れ？」

『男を一人連れてます。プライベートか仕事かは分かんないですけど』

「サンキュ、分かった。急いでいくよ」

ここ西麻布から渋谷の「鳥幸」まではタクシーで十五分とかからない。料金も千円かそこらだ。

慶太は直後にきたタクシーを強引に停めて乗り込んだ。チケットが使えない会社なのは分かっていたが、それどころではない。

そうか、島崎ルイか――。

音楽プロデューサーの秋吉ケンジと破局して以来、ルイには特に浮いた噂はなかった。しかし、ルイの父親は映画監督の島崎潤一、母親は昭和の大女優、香川よう子だ。真剣交際だろうが相手が家庭持ちの不倫だろうが、ルイに男ができたとなればその波及効果は決して小さくない。両親を巻き込んでのお祭り騒ぎが期待できる。今からワイドショーの取材班が島崎邸の前に群がる図が目に見えかぶ。

監督、監督、ルイさんの交際相手、父親としてはいかがですか、いつから交際についてはご存じでしたか、奥さまの香川さんはなんと仰ってますか、相手の男性は挨拶には見えたんですか――。

渋谷109の近くでタクシーを降り、あとは店まで駆け足。慶太が着いたときエレベーターは八階にあったので、さらに階段も駆け足。「鳥幸」のある四階に着いたときには、もう下半身が砂袋のように重たくなっていた。

「いらつしや……あ、矢口さん」

連絡をくれた堀井が自動ドアを入ったところで待っていてくれた。

「どう……まだ、いる？」

だが慶太が訊くと、彼はすまなそうにアゴを出してみせた。

「惜しかったつすね。ほんの二、三分前に、お会計済ませてお帰りになっちゃいました」

そんな、殺生な。

「だって……連絡、もらって……すぐ、タクシー乗って、きたんだぜ。十、五分も……かかって、ないぜ。なんで、そんなすぐ、帰っちゃうの」

「いや、俺が気づいた時点で、一時間くらい経ってたみたいなんですよ。ほら……」

堀井が、内緒話の形で顔を寄せてくる。

「……ルイって、実物はやたらとデカいでしょう。分かんなかったんですよ、最初。でも、何回か部屋に出入りしてるうちに、あれ、これって島崎ルイじゃん、と気づいたわけですよ」

あの時点で一時間以上経ってるって、それならそうと行ってほしかった。でも、いま恨み言をいっても始まらない。

「相手、どんな男だった。見たことあった？ 芸能人？」

「いや、芸能人っぽくは、なかったですね。ルイを奥に座らせて、わりとかしこまつてる感じだったな。注文も全部、男がしてたし。ネクタイはしてなかったけど、ジャケット着てて、真面目な感じで。あそうそう、その男、ルイよりさらに背がデカかったですね。そういった意味じゃ、わりとお似合いつていうか」

いや、その線だったら、たぶんハズレだ。ルイと一緒にいるバカデカイ男といたら、あれだ。名前は覚えていないが、柏木夏美かしわぎなつみなんかを担当している、フェイスプロのマナージャーだ。

まあ一応、これも控えネタとしてストックしておくか――。

NHKのすぐそば、文化村通りにある馴染みのビアラウンジに顔を出し、ヒューガルデンの生を注文。鯉にしんのエスカベッシュをつまみながら、しばし愚痴ぐちをこぼす。

「島崎ルイがいるっていうから飛んでつたのにさ、今さっき帰ったばかりだって……また空振りだよ。参っちゃうよ」

カウンターの途中で、口ヒゲの店長が苦笑いを浮かべる。

「慶太さん、芸能に移ってから、やたらと空振りが多いですね」

「なんつーかさ、政治家より、やつは芸能人の方がすばしっこいんだよ。鼻頂の店もあちこち変わるしき。ほんと面倒臭い」

政治家より芸能人の方が取材しづらいというのは本音だ。そもそも慶太は、いまだ芸能スキヤンダルそのものに報道する価値を見出せずにいる。

別に島崎ルイがマネージャーと付き合おうが、近藤サトルがクラブで全裸になるうが、藤井涼介が乱交パーティーに参加しようが、そんなことはどうだっていいと思っっている。たとえば覺せい刑所持で捕まったとか、轢き逃げをしたとかいうのなら報道すべきだと思うが、下半身事情に関しては正直、まるつきり興味がない。

「……ご馳走さん」

「はい、毎度ありがとうございます。千七百円です」

まだ終電に間に合いそうだったので、渋谷駅まで戻って東急田園都市線に飛び乗った。隣合わせた女の顔色がやけに青く、いつ嘔吐されるか気が気でなかったが、なんとかふた駅、三軒茶屋までもつてくれたのでよかった。あとはどうなるうと知ったことではない。

慶太の住まいは三軒茶屋駅から歩いて五分ほどの住宅地にある。初対面の女性にそう教えるのと、判で押したように「お洒落じゃん」といわれるが、実際に部屋に招くと「三軒茶屋にもこんなところあるんだね」と変に感心される。要は、お洒落には程遠いオンポロアパートナーということだ。

ただ、こんなところでもいそいそと通ってくる女はいる。

「ああん、ケイちゃん、遅いよお」

「なんだよ。こんなとこで待つてんなよ」

村井保子。駆け出しの頃にジャイアンツの取材をしていて知り合った女だ。原監督のファンだというので意気投合したが、まさか、こんなに何年も関係を引きずることになるとは思っていなかった。

「だって、今日は休みでしょ？ いると思っただもん」

「休みだって人に会うことはあるって、何千回もいつてるだろ。っていうか、くる前に電話くらいしろよ。こえーんだよ、ドアの前にお前が座つてつと」

派手好きな妖怪、太った地縛霊、あるいは単なるブス。短めのスカートを穿くのをさえ控えてくれれば、もう少しグロテスクな感じは抑えられると思うのだが。あるいは徹底的に脚を細くするとか。

「鯛焼き買ってきたよ」

「いつ」

「九時頃」

「いい加減カチカチだろ、もう」

「私があつたかいうちに食べたけど」

こんな女の相手をしている場合ではない。明日は午後から編集部で企画会議がある。

「お邪魔しまーす」

「勝手に入んなよ。つてか声でけーよ」

「週刊キンダイ」の編集者及び記者は毎週水曜、会議でネタを五本出さなければならぬ。これは取材班員にとつては最低限のノルマだ。

「ケイちゃん、シャワー浴びる？」

「俺はいい。めんど臭え」

だが現時点で、慶太はまだ一本もまともなネタを思いついていない。ルイとフェイスプロのマネージャーに恋の予感？ まあ、仮にこれを一本とするとしてだ。

「やだケイちゃん、せつかち過ぎ」

「うるせえ」

「Qrosの女」ネタも、他の記者とかぶりそうで怖い。大倉清二監督に当たってみて、その感觸次第だろうか。これで二本として。

「ちよつと……ちちゃんとゴムして」

「あとで着ける」

近藤サトルの全裸ダンスも、写真がないとインパクトにかける。しよせん「やつたらしいよ」という噂レベルの話に過ぎない。しかも奴は常習犯だ。記事に仕立てるにはかなり工夫が必要だろう。それでも強引に一本に数えるとして、計三本。

「ケイちゃん、私のこと好き？」

「別に」

あと二本、何か面白いネタはないだろうか。かつてのトレンディ女優、山本奈^な絵^えの復帰作と騒

がれたドラマが視聴率低迷で打ち切りになったが、その本当の理由は？ なんてのはどうだ。小耳にはさんだ話では、どうも大手事務所社長の意向が働いたということだった。

「あつ、あつ……ケイちゃん、ゴム」

「うるせえ」

致し方ない。あまり信用できる相手ではないが、明日、奴をメシにでも誘ってみるか。

園田芳美そのだよみ。業界では有名なホラ吹きオヤジだが、十回に一回は真実を語り、百回に一回は大スクープを提供するといわれている伝説のフリー記者だ。または「ブラック・ジャーナリスト」ともいう。

「あれ……ケイちゃん、もうイッチャつたの？」

違う。園田の、あの悪代官面あくだいかんづらを思い出したら、急にやる気が萎なえただけだ。

2

園田に、明日の午前中に会いたい旨のメールを送り、布団をかぶった。翌朝は九時頃まで寝ているつもりだったが、寝相が悪く、寝言と歯軋はぎしりがうるさく、おまけに口が臭い保子のお陰で八時には目が覚めてしまった。

「……ケイちゃん、おはよ」

「お前、さっさと服着て出てけよ」

シャワーを使わせてやり、ドライヤーを貸してやり、腹が減ったというので食パンを一枚めぐ